「ともに生きる」福祉と禅仏教

－仏教者・辻光文の福祉実践とその思想－

○　花園大学　　氏名　澤野　純一（会員番号００７６４７）

辻光文　仏教　社会福祉

１．研 究 目 的

現代日本の社会福祉は、西洋諸国から輸入された思想と支援方法に基づいている。しかし、現代においてもなお、日本には東洋的思惟形態が深く根ざしており、そこから独自の社会福祉が展開される。今回取り上げる辻光文の福祉実践も、その様な実践のひとつに数えられるものであると考えられる。

辻光文は、長く、関西の児童自立支援施設（当時は教護院）Ａ園において児童自立支援員（当時は教護）として勤務され、養護問題と非行を兼ね持つ子どもと共に生きた人であり、現役を引退された現在においてもなお、特に関西における児童福祉分野においてその独自の存在を広く知られる人である。辻の福祉実践は極めて独創的かつ重要な内容を持つものであるが、それ故に却ってユニバーサルな広がりを持つものであるとも言える。このことは、辻が真摯な（禅）仏教者であることと深い関わりを持つものと考えられる。

辻は、1930 年に秋田県の禅寺の末っ子として生まれている。青年の頃から「生きるということは一体何だろうか」という人生における大変大きな問題を持ち続け、特に 20 代において極めて激しい人生の苦悶に陥っている。その様な厳しい状況の中、辻は、当時の南禅寺管長・柴山全慶の後押しによって、あえて出家をせず、在家の立場で求道を続けていた。様々な職を転々としていた辻は、あるきっかけで、当時の不良少年・少女達と接触を持つようになり、その結果、妻と共に、31 歳にして関西にあるＡ園で働くことになった。この時点において、仏教者辻の求道と福祉実践が出会うことになる。辻の福祉実践の根底には、人の「いのち」をどこまでも深く見つめてゆく姿勢が存在するが、このことは若き日から絶えず胸に抱いていた「生きるということは一体何だろうか」という問いに裏打ちされているものであると考えられる。

西洋近代以降の社会福祉は、その発生の起源をキリスト教の中に持つと考えられるが、辻の福祉実践は､西洋的な方法論とは非常に異なる発想と観点を持っている｡本発表では、仏教者辻光文の福祉実践を考察し、その独自の思想の解明を試みたい。

２．研究の視点および方法

辻光文の著作に対する文献研究。ご本人及び関係者に対するインタビュー調査。

３．倫理的配慮

ご本人には従前に了承をいただいている。また、当時の子ども達に関する事項に関しては、関係諸機関に十分相談し、厳重なプライバシー保護に努める。

４．研 究 結 果

辻光文は、福祉実践における子ども達との関わりの中で、常に人の「いのち」について考察している。辻は、自身も子ども達も同じ「いのち」を生きているのであり、個々の「いのち」はその根底において繋がっているものと見る。その様なことから、辻にとって、子どもひとりひとりの「いのち」を見るということは即ち、辻自身の「いのち」を見つめるということに繋がり、逆に辻自身の「いのち」を深く見つめることは即ち、子どもの「いのち」を見つめることに繋がってゆく。このことを辻は禅仏教で言う「自覚」の問題として捉える。その様な辻にとって、「いのち」とは自分の力を超えているものであり、また、自ずから展開する性質を持っている。辻は、目覚めた子ども達の間で世代を超えて受け継がれてゆくものが存在すると言い、それを「集団の風土」と呼ぶ。その中で、辻は「一人の子どもを支えるものは一体誰なのかというと、私は職員ではなく子ども達だと言いたい」と述べ、更に「『集団の風土』というものを常に大事にしてゆくのが、われわれ職員の役割である」と言っている。また辻は、児童自立支援において最も大切な事柄として「情性を育てること」を挙げる。そして情性というものは「生活の中のすべてを通して知らず知らずのうちに浸透してゆく」ものであり、その様な意味で「福祉という概念は『生活』ということと一緒のように思う」と述べる。しかし「情性」を育てるということは、極めて難しいことでもあり、その為には「なまじっか指導するとか、教えるとかいったことを一切捨ててしまう必要」があり、「私たちがあれこれ教えたりさせたりしてゆくというよりも、『一緒に何もかもやろうじゃないか』という生活の姿勢、その展開の中にある」と言う。禅仏教では「対象と一枚になる。ひとつになる」とよく言われるが、辻のこの発言の内容は、この態度に非常に近い。更に辻は、福祉における「しあわせ」は、個人的な幸せではなくて、社会的な幸せであり、更に言えば、福祉とは「ともに生きる、よく生きる」概念であると言う。辻の見るように我々の「いのち」が、その根底において繋がっているものであるならば、福祉ということも、個々で完結するものではなくて、繋がっていくもの、社会的なものにならざるを得ない。辻の言う「ともに生きる」福祉とは、徹底した「いのち」を見る眼を根底に据えた、極めて大きな問題提起が含まれていると考えられる。

5. 考 察

西洋近代社会の成立とともに始まった社会福祉は、支援（サービス）の利用者と提供者の客体化が前提とされており、その思想的背景にはキリスト教の影響がある。この事実はあまりに自明であって、それを疑うということは考えられなかった。しかし、辻光文の福祉実践は、この「客体化」と 180 度異なる立場に立っていると言ってよい。この立場は、子ども達との悪戦苦闘の生活の只中で育まれた辻の深い仏教理解と「いのち」を見る視点からもたらされたものであると考えられる。その様な意味で、辻の言う「ともに生きる」福祉とは、極めて東洋的な思想基盤を持つものであると言うことが出来るだろう。